以上は私の椿山登山に伴うささやかな收穫であるが、同好の士と共に御土の各地を歩いて、こうした理解を深めたいと念じている。

（おわり）

随想

毛利神社の再建を望む

付・神社参拜の逸話を二、三

山田平之丞

（本会顧問・佐伯市北中区）

毛利神社は佐伯町の中心で、矢筈会も骨折って、旧佐伯城々山天守閣跡に創建され、昭和四年四月六日鎮座祭が執り行わせられた。祭神は豊後国佐伯藩主初代高政公六代高慶公、八代高標公、そして十一代高泰公の四柱。

普通に新しい神社の鎮座祭には、概ね次のような祝詞が斎主によって奏上される。（書き下しの普通文になおす）

掛まくも畏こき 何こ神社の大前に 社司（社掌）位勲功 斎何某恐み恐みも白さく 大神の天の御蔭と隠りまさむ瑞の御殿 清く美しく造り仕へ奉りきへぬるに依りて 今日の吉き日の吉き刻に還し鎮めませ奉りぬ 是をもちて禮代の御食御酒 穢穢の物き置足しして 今より て奉るまさき 平らけく安らけく聞食して 今より往先大御心平穏に此大宮を静宮の安宮と長久に鎮坐せと 恐美恐美も白す

神社が政治に直結していた場合には、神社の祭典には各々の神社の社格に応じて、勅使、地方長官等が供進使として参向、みてぐらを奉る。その祭式の行事開扉、開扉、神饌の献撤、御幣物の献撤、祝詞奏上、玉串奉奠等極めて荘重。司々の作法亦厳粛であった。供進使には随員二名を附して居るのだが、ともにともに神前に一の失態なきよう、心をこめて仕えまつるのである。

つねづね作法の習熟には怠りなきよう努めては居るものの、練達堪能の域に達することは至難である。特に装束を着、冠をかぶり、履を穿き笏をもって、常時と異なる服装をするのだから、ヒヤツとさせられる場合が多い。（装束の色合は勅任は黒、奏任は緋、判任は縹である）履はしたうづきはいた足をそのままさしこむのだが、時に脱けることがあるが、前もってかかる場合の助け舟に異式ではあるけれど、紙緒のぞうりを代用する。これだと大丈夫で、立居に装束の裾をふんで、よろけるということはないが、安心ならぬは冠である。随員のかぶる冠は自家専用のものでない。備付のレディメードであるから、その人の頭の太さと、冠のサイズがピタリと合わない。

冠の方が太い場合は、中に紙などまげて入れて、ちょうど合うようにするけれど、頭の方が太い場合には、そういうわけにはまいらぬから、冠は千ヨコナンと頭上に小さくのせたかたちとなる。だから礼や揖の場合に、細心の注意を払って居ないと、冠をとばすおそれがある。

自場の八幡様のお祭に某随員がこれをやった。此の大失態に、うろたえを狼狽のあげく冠を前後にかぶった。爆笑が前後にゆらりゆらりゆれている。目ざとく見つけた供進使が目顔で知らせても、御本人一向さとらぬ。端然笏をもってすまして居る。厳粛をきわめた祭典の満場哄笑うずまくというはでなシーンとなった。

祝詞奏上の後に玉串奉奠がある。（玉串とは、玉向串の約というが、榊の枝に木綿中子をつけたもので神に奉る。美めて太玉串などという）

参列の氏子の主だつたものも捧げ奉るが、かなりながい祭儀にしびれをきらしている人たちの中には、玉串を捧げたまま神前に大きな音をたてて、バタとたおれ、鄭を神前に供えたような形を演ずる。まことに大醜態である。しびれとはしびれをきらす、しびれがきれたなどいい、長座の御などと一時血の運行が止まつて感覚を失い、足が死んだようになつて、動作がすべてわからんようになるのである。所々のお祭にも時々此の演出があり、今に話の種に残つて居る。

城あとの老松の樹の間ほろほろと桜散るなり
春告げ顔に

昨日の四月五日、藩祖高政公の後三位贈位の祭典に参向された久米大分県知事、また毛利家当主高弟公も、今日の此の鎮座祭に御臨席なされていたが、祭典がすむとお二人ともフロックの勝をさすり、顔見合せて哄笑されたお二人ともシビレをきらして居たのである。まさかこけるようなへマはしなかつたけれど。

南米毛利神社（例祭は十月十七日）は城山山頂に神威いやちこ神鎮りまして、街の人々の崇敬いともあつかつたが、昭和二十年（月日忘却）アメリカの飛行機に爆撃されて炎上した。奴さん軍事施設があるとみたのだろう。

あとには石の祠を建てたのであるが、当時佐伯に於ける毛利家のこと一切を掌つて居て「お家の忠臣」とニックネームを貰つて居た片岡老人が、

「無茶なことをする奴等が多くてこまる。祠をひつくりかえしていたづらをするのだから。」

とよく憤慨されていた。

その毛利神社は、今だに再建されていない。今や神社は宗教法人となつて、市なんか世話することが出来ない。矢筈会などが世話するとよいのだけれど。佐伯市は今はよそもんの町となつている。山鹿素行の言つた「耕さず、急らず、紡がず」で、殿様の丸抱えであつた藩士の子孫は、祭神の縁も忘れてしまつているのではないか。

（おわり）

研究

勇士寺島大学

―猪と山代とほら貝――

会員　岩田善市

大友興廃記によると、大友宗麟公は弓箭の御行の餘日には、狩場の御造興折々であつた。

天正二年四月十五日には佐伯へ出向、佐伯紀伊介惟教は御馳走承つて諸準備をし、十六日には大入島の狩に鹿五百頭を打ちとり、又十七日には彦嶽の麓で鹿二百三頭を仕止めている。翌十八日には藩戸狩で四百八十頭の狩をし、廿日には久部、堅田両所で御鷹狩を行つた。

同年秋には津久見山で笛野と云う狩をする。鹿笛の名手をせんぎし、佐伯惟教に申付て佐伯末木の六郎五郎と云う鹿笛の上手を呼びよせ、宗麟公の案内ききせた。六郎五郎が笛を吹き、宗麟に矢頃を知らせて鹿を打つと云う趣向である。

同三年四月には野津山で狩をし、同四年には津久見ひろはいと云うところで狩をした。この時のことである。佐伯惟教の家来寺島大学が、荒れ狂う大猪に乗び乗り、大友義統公見物する前で仕留めて、誉れをあげたのであつた。

大友興廃記[illegible]